感染症対策について議論

～府内連携体制をめざして～

第１９回府国保地域医療学会

第１９回府国保地域医療学会は、１０月１７日（土)、ルビノ京都堀川に、府内９施設の医師、看護師、事務職員・技術職員、市町の保健師、本会職員ら約１７０人が参加し開催された。

年度当初に発生し、現在蔓延しつつある新型インフルエンザの関係で注目度の高い「感染」を中心テーマとして、発表や講演があり、活発な討論が繰り広げられた。

府国保診療施設協議会を代表して片田副会長による開会挨拶に続いて、学会長である京丹後市立久美浜病院の奥田院長が挨拶。院内感染の予防対策は病院や診療所において重要な課題かつ永遠のテーマでもあり、また新型インフルエンザの流行が社会問題化した背景もあり、「感染」をテーマに決定したと述べた。来賓挨拶は山田府知事の祝辞を、府健康福祉部医療保険課の西垣課長が代読した。

午前の研究発表は、医療法人財団新大江病院の竹村院長を座長に、医師、事務職、技術職の４題、公立南丹病院の大嶋看護部長を座長に看護師らの４題、さらに府市町村保健師協議会の西川会長（京田辺市保健師）を座長に保健師から２題の計１０題が行われた。看護師や保健師の発表にフロアの病院関係者から質問が出るなど熱心な論議が交わされた。

午後の特別講演は、京都大学医学部附属病院検査部・感染制御部の一山智部長が「院内感染対策と医療安全」のテーマで、感染症予防・早期対処の重要性を示し、京都大学病院で行われている感染症予防対策について、医療を実践する視点から紹介した。

感染を引き起こす原因を調査し、根絶していく必要があり、それには職員の意識の向上と医療環境の整備が極めて重要であるとし、病院全体の協力が必要となると述べた。また、最近の感染症の病原菌は抗菌薬に対しての体制を獲得してきており、抗菌薬耐性菌の蔓延は病院の枠を超えて、地域へ拡大することが懸念され感染対策についても地域として連携が必要となってくると訴えた。

パネルディスカッションは「感染」をテーマに、公立南丹病院の梶田院長を司会者にして行われた。まず、京丹後市立弥栄病院の濱口内科医長が「当院での発熱外来への取組」、公立南丹病院の上田感染管理認定看護師が「当院における新型インフルエンザ感染対策」、公立山城病院の藤井感染管理認定看護師が「院内感染防止対策の取り組み～感染管理認定看護師の立場から～」、国保京丹波町病院の腰山薬局長が「当院における感染対策の現状と問題点」と、テーマである「感染」に関する活動の体験を発表した。

発表についてフロアから質問や意見が出され、助言者の一山部長は「京都府全体としての封じ込めと応援体制という感染症対策を確立できたらいいです。」と感想を述べた。